チンギス・カン家の通婚關係の變遷

宇野伸浩

はじめに
一　チンギス・カンの子の世代におけるアルチ・ノヤン一族との通婚關係
二　チンギス・カンの孫以降の世代におけるアルチ・ノヤン家との通婚關係
（1）オゴデイ家とアルチ・ノヤン家
（2）トルイ家とアルチ・ノヤン家
三　クドカ・ベキ家との姻戚關係の擴大
（1）クドカ・ベキ家との通婚關係の始まり
（2）トレルチの娘たち
（3）チャガタイ家とクドカ・ベキ家
（4）ジョチ家とクドカ・ベキ家
（5）フレグ家とクドカ・ベキ家
（6）アリク・ブケ家とクドカ・ベキ家
四　モンケの卽位とアルチ・ノヤン家
まとめ

はじめに

チンギス・カン家はさまざまな部族と通婚關係を持っていたが、そのなかでもとくにチンギス・カン家の姻族として知

られているのは、ウンギラト族のアルチ・ノヤン家とオイラト族のクドカ・ベキ家である。ウンギラト族のアルチ・ノヤン家は、元朝の宮廷に代々カトンを送り込み、クビライ家の姻族として繁榮した家系であり[1]、オイラト族のクドカ・ベキ家は、チンギス・カン家の各王家と通婚關係を持ち、とくにアリク・ブケ家と密接な關係をもったといわれている家系である[2]。この二つの重要な姻族については、これまでにも多くの優れた研究があり、様々な側面が明らかにされてきた。

さて、從來この二つの姻族については、それぞれ別個に分析されることが多かったが、兩者を比較してみると、ウンギラト諸族は古くからチンギス・カン一族と通婚關係があり、そのなかでもアルチ・ノヤン家は、チンギス・カンの第一カトンであるボルテの弟の家系として最も有利な立場にあった姻族である。一方、クドカ・ベキ家は、部族長クドカ・ベキの功績により、チンギス・カン家と姻戚關係を持つようになったいわば新參の姻族である。しかし、それにもかかわらず、クドカ・ベキ家が姻族として急成長し、アルチ・ノヤン家と肩を並べる存在になっていたのはなぜであろうか。

筆者は、最近、構造人類學の手法を用いて、チンギス・カン家の通婚關係の分析を試み、その結果、クドカ・ベキ家との通婚關係もアルチ・ノヤン家との通婚關係も、連續した場合には類似したギブ・アンド・テイクの通婚パターンを持ち、兩者は同じ緣組システムに基づいているという結論に達し、これについては別稿を用意している[3]。

ところが、同じ時期におけるクドカ・ベキ家との通婚關係と、アルチ・ノヤン家との通婚關係を比較してみると、兩者がともに連續しているとは限らず、なかでも、チンギス・カンからクビライ・カンにいたる世代は、アルチ・ノヤン家との通婚關係が連續しなかった時期である。そのため、この時期の二つの通婚關係の展開の仕方を比較してみると對照的な違いがあり、クドカ・ベキ家の方は、チンギス・カン家全體と通婚關係をスムーズに連續させたのに對し、アルチ・ノヤン家は、チンギス・カン家と何度か相互の通婚關係をスタートさせながら連續せず、結果的にクビライ家との通婚關係に縮小してしまった。

本稿では、このようなチンギス・カン家の二大姻族との通婚關係の展開の仕方に注目し、まず、アルチ・ノヤン家との

通婚關係の擔い手が、チンギス・カンの子の世代と孫の世代の間で、ジョチ家、チャガタイ家からオゴデイ家、トルイ家へ大きく變化したことを明らかにし、次に、クドカ・ベキ家が、その間隙を縫って廣く網をかけるように、姻戚關係を一氣に擴大していったこと、さらに、モンケの卽位がアルチ・ノヤン家にとって不利に働き、アルチ・ノヤン家の通婚關係の對象が主としてクビライ家に縮小してしまったことを論じてみたい。

一　チンギス・カンの子の世代におけるアルチ・ノヤン一族との通婚關係

ウンギラト諸族は、チンギス・カン一族にとって先祖代々の姻族であり、三代上のカブル・カンの時代からウンギラト諸族と通婚關係があったことを確認できる(『集史』部族編, JT/A1: pp. 166—167)。チンギス・カンの世代でも、チンギス・カンがウンギラト族のボルテを娶っただけでなく、弟のジョチ・カサルはコロラス族のアルタンと、末弟のテムゲ・オッチギンはオルクヌト族のスンドクチンと、妹のテムルンはイキレス族のボトと結婚した(JT/TS 1518: fol. 59b—60a)のであり、代々のウンギラト諸族との通婚關係の延長線上で、チンギス・カンとボルテの婚姻が行われたのである。

このチンギス・カンとボルテの婚姻は、元朝時代のアルチ・ノヤン家との通婚關係の發端となる婚姻であるが、しかしこのときは、兩家雙方が積極的に姻戚關係を結んだ譯ではなかった。ボルテの父親デイ・セチェンは、二人の結婚を澁っていたのであるが、ボルテの弟アルチ・ノヤンの努力によりようやく二人が結婚できたというのが眞相であったのである(『集史』部族編ウンギラト族, JT/A1: p. 394)。これは、チンギス・カンがまだ弱小勢力であったからであろう。

その後、兩家雙方が積極的に通婚關係を結ぶようになったのは、チンギス・カンの息子たちの世代の婚姻からである。チンギス・カンの息子たちの中で、デイ・セチェン一族からカトンを娶ったのは、長子のジョチと次子のチャガタイであった。

まず、ジョチは、『集史』ジョチ・カン紀に、

ジョチ・カン（Joči Qan<Juji Khān）の二番目の息子バト（Batu<Bātū）。バトはウンギラト族出身のアルチ・ノヤン（Alči Noyan<Alji Nūyān）の娘のオキ・フジン・カトン（Öki-fujin Qatun<Ūki Fūji Khātūn）から生まれた。

（JT/TS 1518: fol. 158a）

とあるように、アルチ・ノヤンの娘のオキ・フジンを娶った。婚姻の時期は、二人から生まれたバトが、一二五五年に數え四八歳で死去していること（Pelliot 1949: p. 29; Boyle 1971: p. 122）から逆算すれば、一二〇八年生まれであるので、ジョチとオキ・フジンの婚姻は少なくとも一二〇八年以前であることがわかる。

もう一人のチャガタイは、第一カトンとしてウンギラト族のイェスルンを娶った。このイェスルンについては、『集史』チャガタイ・カン紀に、

チャガタイにはカトンや側室がたくさんいたが、もっとも信頼されていたのは二人のカトンであった。第一がイェスルン・カトン（Yesülün Qatun<Īsūlūn Khātūn）であり、彼女は彼の信頼できる息子たちすべての母親であった。彼女は、ウンギラトの王であるダアリタイの息子カタ・ノヤン[4]の娘であり、チンギス・カンの大カトンのボルテ・フジンとイェスルン・カトンの父親とは父方のイトコであった。

（JT/TS 1518: fol. 168a）

とあり、ウンギラト族のダアリタイの孫娘であることがわかる。ダアリタイはボルテの父親デイ・セチェンの兄弟であるので（JT/A1: p. 394）、イェスルンはボルテのイトコの娘にあたる。イェスルンが死去すると、チャガタイはイェスルンの姉妹のトゲンを娶り、ソロレート婚を行った（JT/TS 1518: fol. 168a）[5]。

さて、このジョチとチャガタイの婚姻のうち、姻戚關係として重視されていたのはジョチの婚姻である。なぜなら、ジョチとオキ・フジンの婚姻は、アルチ・ノヤン家とのもうひと組の縁組とセットになり、相互の通婚關係の形をとっていたからである。そのもう一つの縁組とは、アルチ・ノヤンの息子チグゥとチンギス・カンの娘トマルンの婚姻である。

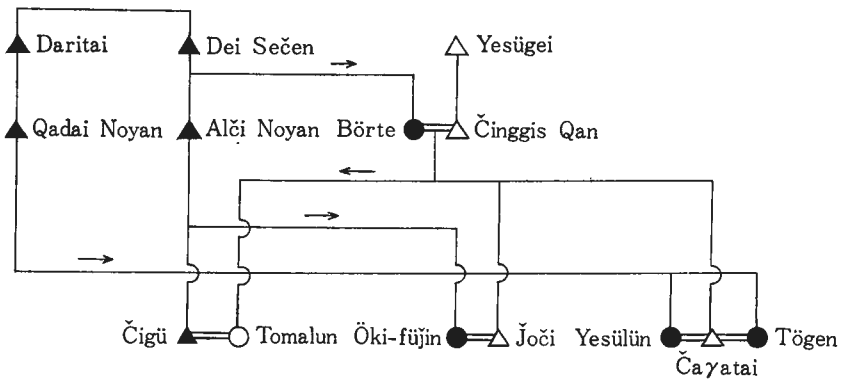

圖1　チンギス・カン家とアルチ・ノヤン一族の通婚關係

チグゥとトマルンの婚姻は、**圖1**のように、上の世代の婚姻と連續しており、チンギス・カンが、妻ボルテのお返しとして、ボルテの兄弟の息子へ、自分の娘トマルンを嫁がせるというギブ・アンド・テイクのパターンに則っていた。これは、**圖3**の基本パターンに一致する。そして、ジョチの婚姻とチグゥの婚姻の關係は、ジョチが、チグゥの姉妹のオキ・フジンを娶り、チグゥがジョチの姉妹のトマルンを娶っているので、互いに姉妹を交換したことになり、これが**圖2**の基本パターンに一致する。人類學の緣組理論の用語を用いれば、「姉妹交換婚（sister exchange marriage）」である。このようにして、チンギス・カン家とアルチ・ノヤン家の閒では、相互の通婚關係が生じたのであった。

チンギス・カン家の通婚關係の中で、最も密接な相互の通婚が行なわれたクドカ・ベキ家とアルチ・ノヤン家との通婚には、共通のパターンがみられ、その特徵のひとつは、**圖2**の姉妹交換婚によって相互の通婚がスタートすることであり、もう一つの特徵は、それが連續するとき、**圖3**のように、世代毎に交互に女性を婚出させるギブ・アンド・テイクの女性の交換により通婚を連續させるということである。ただ、この場合は逆になり、姉妹交換婚より先に**圖3**のパターンが現れている。

ここで、チグゥとトマルンの婚姻の時期を檢討しておくと、チグゥは、一二一三年にチンギス・カンの末子トルイとともに金朝遠征へ出軍したが、そのと

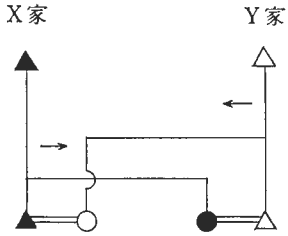

圖2 通婚の基本パターン1
（姉妹交換婚）

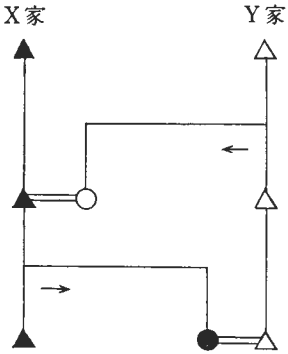

圖3 通婚の基本パターン2

きのことを記した諸史料に、「駙馬赤駒」（『元史』巻一）、「赤渠駙馬」（『聖武親征錄』）、「Čügü Gürigen」（『元朝祕史』二五一節）、「チグ・グレゲン Jikū kūrkān」（『集史』チンギス・カン紀、JT/TS 1518: fol. 95b）とあり、チグゥが當時「駙馬」「グレゲン（婿）」であったとして記されている點で諸史料が一致している。從って、チグゥとトマルンの婚姻は、一二一三年以前であったと考えられ、ジョチの婚姻の時期からそれほど離れていないと見てよいであろう。

もう一つ言及しておきたいことは、チンギス・カン家にとって重要な姻戚關係の擔い手として長子のジョチが選ばれていることである。チンギス・カンが卽位する三年前に、ケレイト族のオン・カン一族との閒で、相互に二組の緣組を結ぼうとして、結局失敗に終わったことがあったが、このときもジョチの緣組が計畫された。このように、この時期には、チンギス・カン家にとって重要な姻戚關係の擔い手として、常にジョチが選ばれていたといえよう。從って、『元朝祕史』に記されているように、ジョチがその血筋を疑われ他の兄弟より低くみられていたとは考えにくい。(6) 可能性としては、ジョチが、當初チンギス・カンの後繼者候補であったことも考え得るかもしれない。

さて、ジョチとチグゥとの閒の姉妹交換婚は、それ以後の世代で、ギブ・アンド・テイクの圖3の基本パターンにそって展開すれば、ジョチ家とチグゥ家との閒の通婚關係として展開するはずである。しかし、ジョチの世代の姉妹交換婚が、その後、實際にジョチ家とチグゥ家との閒の相互の通婚として連續したことを示す確かな例はない。後述するように、ジョチの第二子でオキ・フジンから生まれたバトの家系は、むしろオイラト族との姻戚關係を強めた。ジョチの長子

オルダの家系は、『集史』によると、ウンギラト族出身のカトンをたくさん娶っているが、しかし、チグゥ家の娘であったかどうかはわからない。

また、杉山正明氏が明らかにされたように、チグゥは、オゴデイの即位前後に、青海アムド地方にユルトを移され、アルチ・ノヤン本家から切り離されたことは興味深い（杉山 1983: p. 674; 1992: pp. 153—154）。その結果、ジョチ家にとって、チグゥ家と通婚關係を連續することの重要性は減少してしまったと思われる。

二 チンギス・カンの孫以降の世代におけるアルチ・ノヤン家との通婚關係

前章で述べたように、チンギス・カンの子の世代で、第一カトンのボルテの實家であるデイ・セチェンの一族と姻戚關係を結んだのは、年上のジョチとチャガタイであった。オゴデイ、トルイの場合を檢討してみると、オゴデイの第一カトンのボラクチンの出身部族が不明であり、またトルイにはナヤン・カトンというウンギラト族出身のカトンがいる點は注意すべきであろうが、どちらも、デイ・セチェン一族の娘であったことを示す史料はなく、『元史』卷一一八、特薛禪傳にも、オゴデイとトルイのカトンは記されていない。從って、チンギス・カンの子の世代で、デイ・セチェン一族と姻戚關係を持っていたのは、ジョチ家とチャガタイ家であったとみてよいであろう。

それに對して、チンギス・カンの孫以降の世代になると、ジョチ家とチャガタイ家は、デイ・セチェン一族との姻戚關係から遠ざかり、逆に、オゴデイ家とトルイ家が、巻き返しを圖るように、デイ・セチェン一族、とくにボルテの弟のアルチ・ノヤン家との姻戚關係を強めたのである。チンギス・カンの子の世代と孫の世代の間は、通婚關係のパターンとしては連續しておらず、オゴデイ家とトルイ家は、ジョチ家やチャガタイ家の通婚關係とは別個に、あらたに相互の通婚關係をスタートさせようとしたと考えられる。その時期は、チンギス・カンの孫の世代が婚期に達したオゴデイ・カンの治世にあたる。以下、オゴデイ・カンの時代に、オゴデイ家とトルイ家がアルチ・ノヤン家との姻戚關係を築いていく過程

をオゴデイ家、トルイ家の順に論じてみたい。

(1) オゴデイ家とアルチ・ノヤン家

一二二九年に即位したオゴデイは、自分の後継者として第三子のクチュを選んだ（ドーソン 1968: p. 214）。そして、このクチュが娶ったのが、次の『集史』部族編ウンギラト族の記事によれば、アルチ・ノヤンの孫のカタカシである。

> オゴデイ・カアン（Ögödei Qa'an＜Üktāy Qāān）の息子クチュ（Küčü＜Kūjū）[7]のカトンは、名をカタカシ（Qataqaš＜Qatāqāsh）といい、アルチ・ノヤン（Alči Noyan＜Alji Nūyān）の孫であった。シレムン（Širemün＜Shīrāmūn）はこのカトンから生まれた。
>
> （JT/A1: pp. 400—401）

婚姻の時期を推定してみると、まず、クチュは一二三六年に死去したので、當然二人の結婚はそれ以前である。そして、クチュとカタカシから生まれた長子シレムンが、一二四五年にはまだ「思春期に達していなかった」（JT/TS 1518: 182b）ということから判断して、シレムンが生まれたのは一二三〇年代前半であり、婚姻の時期はその少し前であろう。

以上より、オゴデイの治世の初期に、オゴデイがクチュを後継者に選び、その頃、クチュはアルチ・ノヤン家のカタカシを娶ったとみてよいと思われる。クチュの母親のドレゲネ・カトンはナイマン族出身であり、アルチ・ノヤン家出身ではなかった。そこで、クチュにアルチ・ノヤン家からカトンを娶らせ、後継者としての條件をよくしようとしたのであろう。しかし、一二三六年、クチュは南宋遠征中に死去してしまい、そのため、前掲の史料に見られるように、オゴデイは、クチュの長子シレムンを後継者に選んだ（ドーソン 1968: pp. 123, 214）。

さて、オゴデイ家とアルチ・ノヤン家の通婚は、右のクチュとカタカシの婚姻以外にもうひと組あった。それが、ノカ Noqa とソルカカン Sorqaqan の婚姻である。『元史』巻一〇九、諸公主表の「魯國公主位」の欄に、

> 唆兒哈罕（ソルカカン）公主。太宗の女なり。按陳（アルチ）の孫の納合（ノカ）に適す。

とあり、太宗オゴデイの娘のソルカカンが、アルチ・ノヤンの孫のノカに嫁いだことがわかる。

婚姻の時期について考察してみると、一二三六年七月に行われた戸口の分與について、『元史』巻二太宗本紀に、

（太宗八年秋七月）詔して眞定の民戸を以て太后（ソルカクタニ）の湯沐に奉り、中原の諸州の民戸は諸王・貴戚・斡魯朶に分賜す。拔都（バト）は平陽府、茶合帶（チャガタイ）は太原府、古與（グユク）は大名府、孛魯帶（ボロルダイ）は邢州、果魯干（コルゲン）は河閒府、孛魯古帶（ベルグテイ）は廣寧府、野苦（イェグ）は益都・濟南二府の戸內より撥賜し、按赤帶（アルチダイ）は濱・棣州、斡陳那顏（オッチギン・ノヤン）は平・灤州、皇子闊端（コデン）・駙馬赤苦（チグゥ）・公主阿剌海（アラカイ）・公主果眞・國王查剌溫・茶合帶・鍛眞・蒙古寒札・按赤那顏（アルチ・ノヤン）・坼那顏・火斜・朮思は、並びに東平府の戸內より撥賜するに差有り。

とあり、この記事が『元史』巻九五食貨三の歲賜の條と對應することを松田孝一氏が明らかにされている（松田 1978: p. 88）。それによれば、「駙馬赤苦（チグゥ）」には鄆國公主位の戸口、「公主阿剌海（アラカイ）」には趙國公主位の戸口、「公主果眞」には昌國公主位の戸口が分與されており、いずれも駙馬か公主に戸口が與えられているが[8]、魯國公主位の戸口のみ、公主や駙馬でなく「按赤那顏（アルチ・ノヤン）」に與えられている。その理由として考えられるのは、アルチ・ノヤン家からチグゥ家が切り離された後、この時點でアルチ・ノヤン家に公主や駙馬がいなかったということであろう。従って、ソルカカンとノカが結婚し、ソルカカンが公主となるのは、一二三六年以後であったと考えられる。『元史』巻一一八、特薛禪傳によれば、一二三七年にオゴデイが、アルチ・ノヤンにチンギス・カン家との通婚を奬勵する內容の聖旨を與えているので、ソルカカンとノカの婚姻はその後であった可能性が高いであろう。

さて次に、このノカとソルカカンの婚姻が、通婚のパターンの上でどのように位置づけられるかを考えてみたい。**圖4**のように、ノカとソルカカンの婚姻は、前述のクチュとカタカシの婚姻と組み合わせてみると、クチュの姉妹のソルカカンがノカに嫁ぎ、ノカの姉妹あるいは従姉妹のカタカシがクチュに嫁いだことになる。殘念ながら、カタカシとノカの父

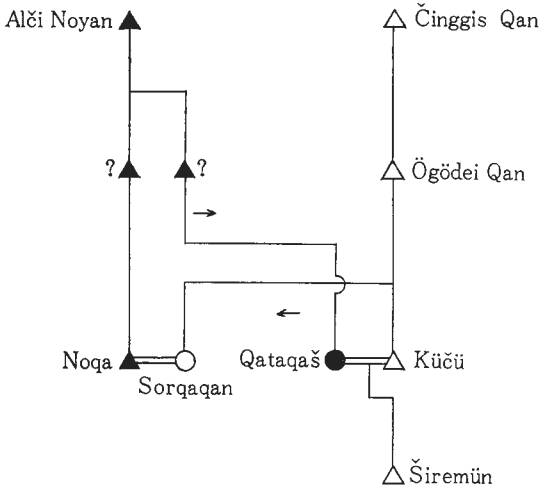

圖4　オゴデイ家とアルチ・ノヤン家の通婚關係

親が不明であるため、姉妹交換婚であったかどうかはわからない。ただすくなくとも、この世代で兩家の間で相互の通婚が行われたことは確かである。從って、この二組の婚姻により、オゴデイ家とアルチ・ノヤン家の間に相互の通婚關係が生じたことになり、次世代に連續することが可能な形になった。このようにして、ジョチ家に流れそうになっていたアルチ・ノヤン家との通婚關係は、オゴデイ家に引き込まれたのであり、そこには、帝位繼承をオゴデイ家に有利に導こうとするオゴデイの政治的な意圖があったと考えられる。

しかし、オゴデイ家が帝位繼承爭いに敗れた結果、オゴデイ家とアルチ・ノヤン家の通婚は、結局はこの一世代だけに終わったのである。

(2)　トルイ家とアルチ・ノヤン家

前述のように、チンギス・カンの孫の世代でアルチ・ノヤン家との通婚關係を強めた家系には、オゴデイ家以外にトルイ家があった。トルイ家の中でも、アルチ・ノヤン家と關係が深いのは、兄弟の中でも年上のモンケ、ジョリケ、クビライである。フレグは、基本的にはクドカ・ベキ家との姻戚關係が強いのであるが、一時的に、アルチ・ノヤンの親戚筋のダアリタイ家との姻戚關係へ傾いた時期があり、それについては、後で言及することにしたい。ここでは、モンケ、ジョリケ、クビライの順で、トルイ家がどのようにアルチ・ノヤン家との姻戚關係を強めていったかを見ていくことにする。

1、モンケ

オゴデイのオルドで昂灰皇后に育てられたモンケは、オゴデイの世話で、最初にコロラス族出身の火里差(『元史』巻三、一〇六、『集史』モンケ・カン紀ではKisa)を娶った。しかし、このカトンは、モンケに氣に入られなかったためか、あるいはオゴデイ家とトルイ家の争いが影響したためか、ルブルクがモンケのオルドを訪れた一二五三年には、第四カトンに落とされていた(宇野 1988: pp. 4—6)。

この火里差との婚姻以後は、モンケは、カトンの序列通り、第一カトンのイキレス族出身のクトクタイ、第二カトンのウンギラト族出身のクタイ、第三カトンのオイラト族出身のオグル・トトミシの順でカトンを娶ったと思われる。後述するように、第三カトンのオグル・トトミシは、もともとはトルイの婚約者であったが、『元史』巻三憲宗本紀に、

> 睿宗(トルイ)の薨るに及んで、乃ち命じて藩邸に歸らしむ。

とあるように、モンケは、トルイの死後、トルイのオルドに歸っており、おそらくそのとき、トルイの婚約者であったオグル・トトミシがトルイのオルドにいて、その後、モンケが彼女を娶ったのではないかと思われる。トルイの死去した一二三二年に、モンケは二五歳であるので、このオグル・トトミシ以前にすでに數人のカトンを娶っていたとしてもおかしくないであろう。

また、モンケとオグル・トトミシから生まれた一人娘のシリン(Širin<Shirin)(JT/TS 1518: 185b; ルブルクの『旅行記』ではCirina, Cherinne, Chirine)の年齢を推定してみると、一二五三年にギョーム・ド・ルブルクがモンケのオルドを訪れたとき、ルブルクには彼女が「大人になった(adulta)」娘に見えたこと(Rubruc/Wyngaert: p. 249)、また、死去した母親のオルドが彼女に任されていたことから考えて、當時十代後半から二十歳前後であったとみるのが妥當であろう。従って、トルイが死去した一二三二年から三—四年以内に、モンケがオグル・トトミシを娶ってシリンが生まれたと考えれば、ほぼ矛盾なく説明できる。また、第一カトンのクトクタイから生まれた長子のバルトが、ルブルクが訪れたときに、すでに

獨立して自分の天幕に住み、二人のカトンがいて、シリンより年上らしいということも以上の解釋と合致する。

以上より、モンケが娶った四人のカトンのうち、最初の三人はいずれもウンギラト諸族の出身であったことになる。そのなかでも、第二カトンのクタイと、クタイの死後第二カトンとなった妹のイェスルは、デイ・セチェンの孫の忙哥陳の娘である(『元史』巻一一四)[9]。このように、モンケは、最初もっぱらウンギラト諸族と姻戚關係を結び、アルチ・ノヤンの一族からもカトンを娶っていたのであるが、後述するように、卽位した頃には、むしろオイラト族のクドカ・ベキ家との姻戚關係を強めることになった。

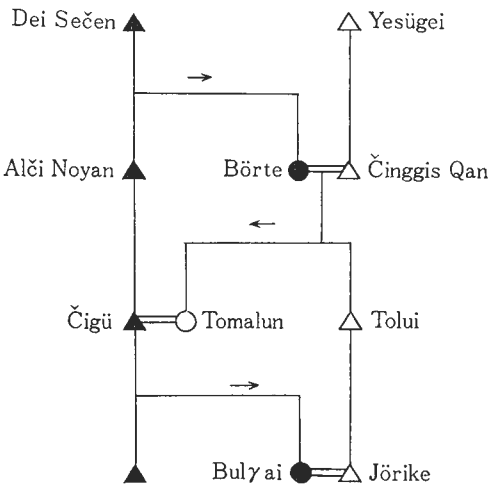

圖5 トルイ家とアルチ・ノヤン家の通婚關係

2、ジョリケ

ジョリケ Jörike は、あまり有名でない人物であるが、『集史』トルイ・カン紀によると、トルイの第二子であり、若くして死去したという(JT/TS 1518: fol. 176a)。母親は不明であるが、ソルカクタニ・ベキではないらしい[10]。このジョリケについて注目されることは、ジョリケがアルチ・ノヤン家の娘を娶っていたということである。『集史』部族編ウンギラト族に、

トルイ・カンの息子ジョリケ(Jörike<Jürike)には、ブルガイ(Bulγai<Būlghay)という名のカトンがおり、彼女はアルチ・ノヤン Alji Nūyān の孫であったが、しかしアルチ・ノヤンの家系(sho'be)には屬さなかった。(JT/A1: pp. 399—400)

とあり、ジョリケがアルチ・ノヤンの孫のブルガイを娶ったことがわ

かる。この記事の中で、ジョリケの娶ったブルガイは、アルチ・ノヤンの孫であったが、アルチ・ノヤンの家系ではないとしている點は、解りにくい部分であるけれども、一つの可能性として、彼女がアルチ・ノヤン家から別れて青海地方に移住した前述のチグゥの娘であったことが考えられる。もしそうであった場合、この婚姻がどのような意味を持つかを考えてみると、通婚パターンとしては圖5のようにきれいに連續しており、この婚姻は、ジョチ家と相互の通婚關係を展開しかけたチグゥ家を、ジョチ家から切り離し、トルイ家との通婚關係へ結びつける役割をはたしていると考えられる。

3、クビライ

チンギス・カンの孫の世代で、アルチ・ノヤン家と最も密接な姻戚關係を結び、元朝時代へ連續する通婚關係をスタートさせたのは、クビライ家である。周知のように、トルイの第四子クビライはアルチ・ノヤンの娘チャブイを娶った。まず、その婚姻の時期を檢討してみると、『集史』クビライ・カン紀に、

> 一番目の息子ドルジ（Dorji/Dürji）。彼はチャブイ・カトンから生まれ、アナンダという名の息子がいた。彼（ドルジ）は年齢がアバガ・カンより上であった。（JT/TS 1518: fol. 196b）

とあることから、クビライとチャブイから生まれた長子ドルジが、弟フレグの長子アバガより年上であることがわかる。アバガは一二三四年二月生まれなので（Jackson 1982: p. 61）、ドルジが生まれたのは一二三四年初頭以前であり、二人の婚姻の時期は、一二三三年以前であることがわかる。

一方、クビライが最初に娶ったカトンについて、『集史』部族編メルキト族に、

> チンギス・カンの時代にウドユト・メルキトの王であり長であったのはトクタ・ベキであった。彼にはクドという名前の兄弟がおり、彼の娘はトルカイチンという名前であった。チンギス・カンは、クビライ・カアンのために、彼が一三歳の時に求めた。彼女をすべてのカトンより先に娶ったが、子がいなかったので、彼女の地位は他のカトンより

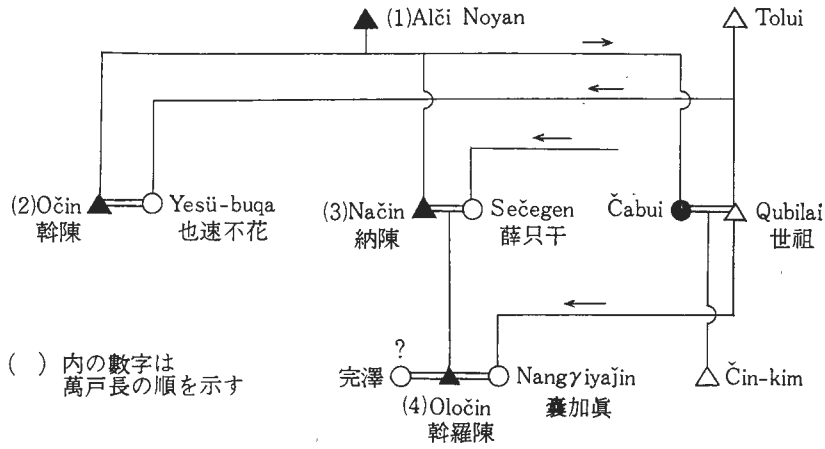

圖6 クビライ家とアルチ・ノヤン家の通婚關係

低かった。

(JT/A1: p.208)

とあることから、クビライが一二二七年に最初のカトンをメルキト族から娶ったことを、邵循正氏が明らかにしている(邵 1985: pp.3-4)。ただし、邵循正氏がこのトルカイチンを大斡耳朶(第一オルド)の大皇后(第一カトン)であったとする點は贊成できない。なぜなら、右の史料に「彼女の地位は他のカトンより低かった」とあるからである。

以上より、クビライが、一二二七年の一三歳の時に最初のカトンを娶ったとすると、その時から一二三四年の二〇歳の時までの間に、大斡耳朶のテグルン Tegülün(帖古倫大皇后)[11]と第二斡耳朶のチャブイを娶り、長子ドルジが生まれたことになる。

さて、クビライとチャブイの婚姻について注目される點は、これがもうひと組の婚姻とセットになり姉妹交換婚になっていることである。すなわち、『元史』巻一一八特薛禪傳に、

> 子の斡陳(オチン)、歳戊戌(一二三八)、萬戸を授かり、睿宗(トルイ)の女の也速不花(イェス・ブカ)公主に尙す。

とあり、アルチ・ノヤンの息子オチンは、トルイの娘イェス・ブカを娶ったことがわかる。そして、イェス・ブカはクビライの姉妹であり、チャブイはオチンの姉妹であるので、**圖6**のように、この二組の婚姻は、クビライとオチンの間の姉妹交換婚になっているのである[12]。この姉妹交

換婚により、アルチ・ノヤン家とクビライ家の間で、新たに相互の通婚關係がスタートした。以後この兩家の通婚關係は、ギブ・アンド・テイクのパターンにもとづいて連續し、元朝の文宗トク・テムルの世代にいたるまで相互の通婚として續くことになる。(13)

以上述べてきたように、トルイ家はオゴデイの治世の前半にアルチ・ノヤン家との間に密接な姻戚關係をつくり、その中でもクビライ家は相互の通婚關係を結んで次世代へと通婚關係を連續させていった。これはオゴデイ家がアルチ・ノヤン家との通婚關係をスタートさせようとした方法と極めて類似している。しかし、トルイ家がオゴデイ家と同じ行動を取った背景に、オゴデイ家とトルイ家の連携プレーがあったかどうかはよくわからない。

三　クドカ・ベキ家との姻戚關係の擴大

前章で明らかにしたように、オゴデイ・カンの時代に、アルチ・ノヤン家との姻戚關係の擔い手になる家系に大きな變化がみられ、オゴデイ家とトルイ家が巻き返しを圖るかのようにアルチ・ノヤン家との姻戚關係を強めた。また、トルイ家でも、下の息子のフレグとアリク・ブケは、當初アルチ・ノヤン家との姻戚關係を持たなかった。その姻戚關係の變化や隙間を埋めるかのように、姻戚關係を一氣に擴大していったのが、オイラト族のクドカ・ベキ家である。このクドカ・ベキ家の姻戚關係が、どのような方法で擴大していったのか、また、それまでアルチ・ノヤン家と姻戚關係を持っていたジョチ家とチャガタイ家が、どのようにクドカ・ベキ家へ姻戚關係の絆を移していったのか、という觀點からクドカ・ベキ家の姻戚關係の擴大のプロセスを次に述べてみたい。

(1)　クドカ・ベキ家との通婚關係の始まり

まず、クドカ・ベキ家との通婚關係の始まりについて簡單に述べておくと、オイラト族の部族長であったクドカ・ベキ

圖7 チンギス・カン家とクドカ・ベキ家の通婚關係

は、一二〇八年にチンギス・カンに服屬し、そのときチンギス・カン軍を先導した功績により、チンギス・カンの娘チチェゲンをクドカ・ベキの息子トレルチが娶ることになった（岡田 1974: pp. 1—3）。

トレルチとチチェゲンの婚姻に關して重要な點は、この婚姻がトルイとオグル・トトミシとの婚姻と組になって、**圖7**のように、姉妹交換婚になるはずであったことである。『集史』モンケ・カン紀に、

彼（モンケ・カン）にはもう一人の大カトンがいる。（彼女の）名をオグル・トトミシ（Oγul-tutmiš<Ūqūl-tūtmish）といい、彼女はオイラト Ūirāt の骨の出身で、クドカ・ベキの子孫 ūrūgh であり、彼らはオルジェイ・カトン（Öljei Qatun<Ūljay Khātūn）の一族である。このカトンは非常に專横的であった。彼女は最初、トルイ・カンの婚約者で

あったので、そのために、自分の夫の兄弟であるクビライ・カン、フレグ・カンを「息子」と呼んでいた。彼らは彼女を恐れた。

(JT/TS 1518: fol. 185b; JT/BL 16688: fol. 32b)

とあり、オグル・トトミシはトルイの婚約者であったが、その婚姻は實現せず、結局、トルイの長子モンケがオグル・トトミシを娶ったことがわかる。

このように、最初の世代の婚姻は姉妹交換婚にならなかったが、トレルチとチチェゲンの婚姻は次の世代へと連續していった。

(2) トレルチの娘たち

トレルチの次世代では、トレルチとチチェゲンから生まれた娘たち、すなわち、オグル・トトミシの姪たちが、次々とチンギス・カン家に嫁ぎ、一氣に姻戚關係を擴大した。その嫁いだ相手は、ジョチ家のバト、チャガタイ家のカラ・フレグ、トルイ家のフレグ、アリク・ブケであり、前述したように、アルチ・ノヤン家との姻戚關係が薄いところにうまく送り込まれたのである。

まず、これらの婚姻について史料をあげておきたい(圖7參照)。フレグについては、『集史』フレグ・カン紀に、

もう一人のカトンのクイク・カトン(Küük Qatun<Küük Khātūn)は、オイラト族の王の骨(血筋)の出身であり、トレルチ・グレゲン(Törelči Güregen<Turāljī Kūrkān)の娘で、チンギス・カンの娘のチチェゲン(Čičegen<Jijikān)から生まれた。オルジェイ・カトン(Öljei Qatun<Ūljāy Khātūn)も彼の娘であるが、他の母親からである。

(JT/A3: p. 8)

とあり、トレルチの娘クイク Küük[14] がフレグに嫁いだことがわかる。また、右の記事の少し後に、

もう一人のカトンのオルジェイ・カトンは、オイラト族の王族の骨(血筋)の出身であるトレルチ・グレゲンの娘で

あり、彼女をモンゴル地方で娶った。　(JT/A3: p.8)

とあるので、フレグはクイクの姉妹のオルジェイも娶ったことがわかるが、前掲の史料にあるように、彼女はチチェゲンの娘ではなかった。さらに、『集史』部族編に、

また彼女(チチェゲン)から二人の娘が生まれた。(15) 一人をエル・チクミシ・カトン(El-čiqmiš Qatun<Ilijiqmish Khātūn)といい、アリク・ブケに與えた。彼女は彼の大カトンであり、彼は彼女を大變愛した。彼女は非常に身長が高かった。彼女から息子はいなかった。もう一人をオルガナ・カトン(Orrana Qatun<Ūrqana Khātūn)といい、彼女をチャガタイの孫でありモエトゥケン(Mö'etüken<Mūātūkān)の息子であるカラ・フレグ(Qara-hülegü<Qarā-hūlākū)に與えた。　(JT/A1: pp. 223—224)

とあるので、トレルチの娘エル・チクミシ・カトンEl-čiqmiš Qatunがフレグの弟アリク・ブケに嫁いだことがわかり、また、トレルチの娘オルガナOrranaは、チャガタイの孫でありモエトゥケンの息子のカラ・フレグQara-hülegüに嫁いだことがわかる。

さらに、ジョチの次子バトについては、『ワッサーフ史』に、

オルガナ(Orrana<Hurghana)には二人の姉妹がおり、一人はオルジェイ・カトンUljāy Khātūnで、フレグ・カンが娶った。もう一人は、ベキ(Beki<Bikī)といい、サイン・カン・バトSāyn Khānī Bātūのカトンであった。　(TV/TS 3040: fol. 9b)

とあり、ベキという名のオルジェイ・カトンの姉妹、すなわちトレルチの娘が、バトに嫁いだという。このことは、『集史』には記されていないが、トレルチの娘に關しては混亂があるとラシード自身が記しているので、『集史』からは漏れたと考えておきたい。ただ、ベキがチチェゲンの娘であったかどうかはわからない。

さて、これらの緣組のうち、婚姻の時期を絞り込めるのは、フレグとクイクの婚姻である。二人から生まれた最初の

息子ジュムクルは、アバガ誕生の一箇月後に生まれており（JT/A8: p.9）、アバガは一二三四年二月生まれであるので（Jackson 1982: p.61）、ジュムクルは一二三四年三月生まれであることになる。もちろん、結婚後すぐ懐妊するとは限らないが、このときフレグが一八歳でありかなり若いこと、またフレグの最初の結婚であったことを考えると、やはり、婚姻の時期はその一―二年前、すなわちオゴデイの治世初期、トルイ死去の前後であった可能性が高い。従って、世代はオグル・トトミシの一世代下ではあるが、婚姻の時期は、モンケとオグル・トトミシの婚姻より少し前か、あるいは同じ時期であったことになる。

また、カラ・フレグとオルガナの婚姻の時期も、ある程度推測することができる。『集史』部族編オイラト族に、

チャガタイは彼女を大變愛し、彼女をオルガナ・ベリ（Orγana beri／Ūrgana Bāri）――すなわち嫁――と呼んでいた。（JT/A1: p.224）

とあることから、この婚姻はカラ・フレグの祖父チャガタイの生前であると考えられ、チャガタイはオゴデイと同じ一二四一年に死去しているので（Boyle 1971: p.149）、婚姻の時期は、オゴデイの治世と考えてよいであろう。

以上より、婚姻の時期を推定できるものは、いずれもオゴデイの治世であった。従って、この時期に、クドカ・ベキ家とチンギス・カン家との姻戚關係は一氣に擴大したと考えてよいであろう。

さて次に、これらの縁組の通婚パターンの特徴を論じておきたい。注目される點は、**圖7**のように、上の世代の婚姻に對して、婚出する向きが逆轉することである。すなわち、上の世代では、チンギス・カン家からチチェゲンがクドカ・ベキ家へ婚出しているのに對し、次の世代ではクドカ・ベキ家からトレルチの娘たちが、チンギス・カン家へ婚出していることが圖から明らかである。これをトレルチ中心にみてみると、彼が自分の妻チチェゲンをチンギス・カン家から娶ったことのお返しとして、次の世代で、自分の娘たちを妻の兄弟の息子たちに嫁がせたことになり、ギブ・アンド・テイクの女性の交換になっている。すなわち、チチェゲンの婚姻とトレルチの娘たちの各々の婚姻とを組み合わせてみれば、前掲

の図3の基本パターンと一致するのである。

なお、オルガナが嫁いだカラ・フレグは、トレルチにとって妻の兄弟の息子ではなく孫であるが、これはチャガタイの後継者候補であった次子のモエトゥケン、三子のベルゲシがチャガタイより先に死去し、そのあとモエトゥケンの息子のカラ・フレグがチャガタイの後継者となり、そのカラ・フレグにチャガタイ家の當主のカトンにふさわしい嫁として、チンギス・カンの血を引くオルガナを娶らせたためであろう。

以上述べてきたように、トレルチの娘たちの世代の通婚は、各々は上の世代の婚姻とギブ・アンド・テイクのパターンにそって連續しながら、同世代で複數の娘を嫁がせることにより、全體としては通婚關係をいくつにも枝分かれさせ、廣く網をかけるように姻戚關係を擴大しているのである。そして、枝分かれした先は、いずれもアルチ・ノヤン家との姻戚關係が弱いところであり、うまく隙間を埋めるように姻戚關係を廣げ、一氣に姻族としての勢力を擴大していったのであると考えられる。

では次に、クドカ・ベキ家との姻戚關係が強まっていく様子を、各家系ごとにまとめてみたい。

(3) チャガタイ家とクドカ・ベキ家

前述したように、チャガタイは、デイ・セチェンの弟ダアリタイの家系からイェスルン・カトンを娶った。チャガタイは、そのイェスルン・カトンとの間に最初に生まれた息子のうち、モエトゥケンを後継者に指名していたが、周知のように、バーミヤーンの戦いで戦死した。そこで一時、モエトゥケンのすぐ下の弟のベルゲシ Belgesi を後継者としたが、このベルゲシも一三歳でチャガタイより先に死去してしまった。(16) そこで、モエトゥケンの息子のカラ・フレグが後継者となったのである。(17)

このカラ・フレグが、クドカ・ベキ家のトレルチの娘の中から娶ったカトンが、オルガナである。チャガタイは、この

孫の嫁をたいへん氣に入ったらしく、『集史』部族編オイラト族に、

チャガタイ（Čaγatai<Chaghatāy）[18]は彼女を大變愛し、彼女をオルガナ・ベリ（Orγana beri<Ūrqana Bāri）——すなわち嫁——と呼んでいた。（JT/A1: p. 224）

と記されており、これから見ると、チャガタイは、後繼者であるカラ・フレグのカトンがオイラト族出身であることには反對ではなかったようである。

一二五一年に帝位についたモンケは、オゴデイ家に對する肅清を行うとともに、廣大なチャガタイ領をバトと分割し、グユクが強引にチャガタイ家の當主の位につけたイェス・モンケにかわって、カラ・フレグを復位させようとした。ところが、カラ・フレグが急死したため、その寡婦のオルガナをチャガタイ家の當主の位につけ、イェス・モンケを處刑させた（ドーソン 1968: p. 290; 杉山 1992: pp. 140—141）。こうして、クドカ・ベキ家出身のオルガナが當主になったことにより、チャガタイ家とオイラト族との親密な關係は決定的になった。モンケにしてみれば、モンケの宮廷で重きを置かれていたオグル・トトミシの姪であるオルガナをチャガタイ家の當主にすることは、それまでオゴデイ家よりであったチャガタイ家をオゴデイ家から切り離し、トルイ家側に引き寄せるためであったと考えられる。

以上のように、オルガナがチャガタイ家の當主の座についたことにより、チャガタイ家の主要な姻戚關係は、ウンギラト族からオイラト族へと完全に變わったのであった。

（4）ジョチ家とクドカ・ベキ家

チャガタイ家と同じくジョチ家ももともとはウンギラト族との姻戚關係が強く、ジョチのカトンの一人であるオキ・フジンは、前述のようにウンギラト族のアルチ・ノヤンの娘であり、バトの母親はこのオキ・フジンであった。つまり、バトはウンギラト族の血を引いているのである。しかし、バトの世代では、むしろ、クドカ・ベキ家との姻戚關係を強めて

いった。

まず、前述のように、バトはチンギス・カン家に次々と嫁いだトレルチの娘たちのうち、ベキを娶った。さらに、『集史』に、

クドカ・ベキの他の息子イナルチ（Inalčï<Inālǰī）について、以下のような話がある。バトは、自分の姉妹の一人を彼に與えた。彼女の名はクルイ・エゲチ（Qului Egečï<Qulūy Īkāǰī）といい、彼女からウルド（Uldu<Ūldū）という名の息子が生まれた。

(JT/A1: p. 226)

とあるように、バトは、自分の姉妹のクルイ・エゲチをトレルチの兄弟のイナルチに嫁がせた。そして、次の『集史』ジョチ・カン紀の記事に見られるように、バトの息子トクカンは、ブカ・テムルの姉妹、すなわちトレルチの娘コチュを娶ったのである。

トクカン（Toquqan<Tūqān）の三番目の息子、トデ・モンケ（Tōde-möngke<Tūdā-munkkū）。彼の母親とモンケ・テムル（Möngke-temür<Mūnkkā-tīmūr）の母親は、コチュ・カトン（Köčü Qatun<Kūǰū Khātūn）であり、彼女はオルジェイ・カトン（Öljei Qatun<Ūljāy Khātūn）とブカ・テムル（Buqa-temür<Būqā-tīmūr）の姉妹であり、オイラト族出身であった。

(JT/TS 1518: fol. 159a)

このジョチ家の通婚は、交換のパターンとしてはあまりきれいに連續していないけれども、圖8のように、ある程度ギブ・アンド・テイクの交換のパターンを見いだすことができる。

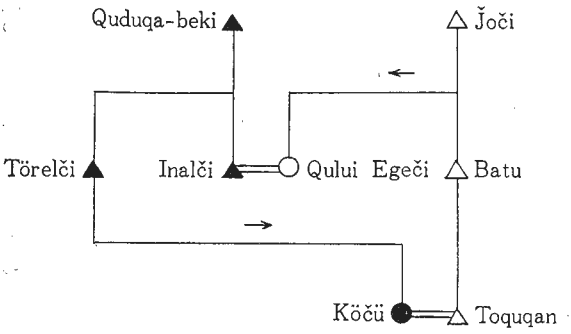

圖8　ジョチ家とクドカ・ベキ家の通婚關係

このように、ジョチ家は、バトの時代に、急速にオイラト族のクドカ・ベキ家との姻戚關係を強めていった。ただ、ジョチ家の中でも左翼のオルダ家は別であり、ウンギラト族との密接な通婚關係を持ち、アルチ・ノヤン一族からもカトンを娶っている。

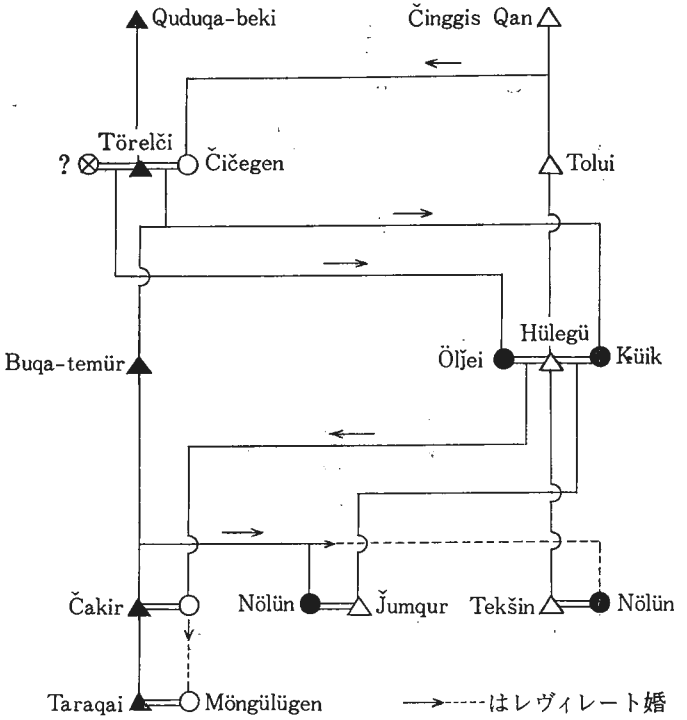

圖9　フレグ家とクドカ・ベキ家の通婚關係

(5)　フレグ家とクドカ・ベキ家

クドカ・ベキ家が廣く網をかけるように姻戚關係を擴大したとき、チンギス・カン家の各王家の中で、クドカ・ベキ家との姻戚關係を最も強めたのは、モンケ、フレグ、アリク・ブケの三兄弟がクドカ・ベキ家からカトンを娶ったトルイ家である。前述のように、トルイ家の兄弟の中で、年上のモンケ、ジョリケ、クビライは、アルチ・ノヤン家との姻戚關係を重視していたが、年下のフレグとアリク・ブケは、クドカ・ベキ家と密接な姻戚關係を結んだ。ただ、フレグは、一時アルチ・ノヤン家との關係を強めた時期もあり、やや複雑である。そこで次に、このフレグ家の場合を分析してみたい。

フレグのイルカン國時代の第一カトンは有名

なドクズ・カトンであるが、ドクズを娶ったのはイランへ行く途中であり、モンゴル高原にいた時代の第一カトンは、『集史』部族編オイラト族に、

（ブカ・テムルの姉妹の）一人はクイク・カトン[19]といい、フレグ・カンの第一カトンであり、ジュムクル（Jümqur＜Jümqūr）の母親であった。（JT/A1: p. 225）

とあるようにクドカ・ベキ家出身の前述のクイクであった（**図9**参照）。フレグは彼女を「モンゴル地方で、他のカトンよりも早く娶った」（『集史』フレグ・カン紀、JT/A3: p. 8）とあるように、フレグは、まず最初に、クドカ・ベキ家と姻戚關係を持ったのである。

ところが、次の『集史』フレグ・カン紀の記事に見られるように、このクイク・カトンはフレグがモンゴル高原にいる閒に死去してしまった。

もう一人のカトンのクトイ・カトン（Qutui Qatun＜Qūtūy Khātūn）は、ウンギラト（Unggirad＜Qunqūrāt）族の王の骨（血筋）出身の……の娘である。クイク・カトンがモンゴル地方で亡くなったとき、彼女を娶り、彼女（クイク・カトン）の牧地（yūrt）を彼女（クトイ・カトン）に授けた。（JT/A3: p. 8）

そして、重要な點は、クイクが死去したとき、ウンギラト族のクトイ・カトンを娶り、クイクの牧地をクトイに與えたことである。これは、第一カトンの地位にクトイをつけたことを意味するであろう。その時期を推定してみると、このクトイから生まれたテクシンとテグデルのうち、弟のテグデルは一二四七年生まれとされているので（Jackson 1984: p. 661）、クトイを娶ったのは一二四五年以前、すなわちオゴデイ・カンの治世かあるいはドレゲネ執政時代にあたる。クトイはウンギラト族の王の血筋であると右の史料に記されているが、より正確には『集史』部族編ウンギラト族に、

別の大アミールもチンギス・カンに仕えていた。彼の名前はカダイ・ノヤン（Qadai Noyan＜Qatāy Nūyān）であり、ここ（イルカン國）でトダイ・カトンのもとにいるメリクは彼の子の一人である。フレグのカトンであったクトイ・

カトンとマルタイ・カトンおよびムサ・グレゲンは、そのメリクのイトコ（父方の叔父の子）であった。

(JT/A1: p. 399)

とあることから、クトイ・カトンが、チンギス・カン時代の大アミールのカダイ・ノヤンの兄弟の娘であることがわかり、このカダイ・ノヤンは、『集史』チンギス・カン紀千戸の條に、

アルチ・ノヤン、（フク・ノヤン、）カダイ（Qadai<Qatāy）、ブクダル、テグデル、センクの千戸。この五人のアミールはウンギラト族であった。アルチとフクと彼らの兄弟は、ウンギラト族の王デイ・ノヤンが彼らの父親であり、チンギス・カンの第一カトンのボルテ・フジンが、彼らの姉妹であった。他の四人のアミールたちは、彼らのイトコであり、デイ・ノヤンの兄弟であるダアリタイの息子たちであった。

(JT/TS 1518: fol. 130a)

とあることから、ウンギラト族のデイ・セチェンの兄弟ダアリタイの息子であったことがわかる。このカダイは、チャガタイのイェスルン・カトンの父親でもあった（**図1**参照）。従って、クトイ・カトンは、カダイの兄弟であるブクダル、テグデル、センクのうちの誰かの娘であったと考えられる。つまり、この時期にフレグの第一カトンの地位は、オイラト族のクドカ・ベキ家から、ウンギラト族のアルチ・ノヤン家と血縁關係の近いダアリタイ家出身のカトンに移ったのであった。このように、フレグは、一時期ウンギラト族との姻戚關係へ傾いたと考えられる。

しかし、モンケが即位し、イラン遠征を命じられたころには、再びクドカ・ベキ家との姻戚關係を強めていた。フレグは、このクトイ・カトンをモンゴルに残し、第一カトンの位には、イランへ行く途中で娶ったケレイト族のドクズ・カトンをつけた。さらに、次の『集史』フレグ・カン紀の記事によると、モンゴル高原に残したクトイ・カトンのオルドを、オイラト族のテンギズ・グレゲンの娘アリカン・エゲチに委ねたのである。

第八番目の息子アジャイ（Ajai<Ajay）。彼の母親は側室であり、名前をアリカン・エゲチ（Ariqan Egeči<Ariqān Īkājī）といってテンギズ・グレゲン（Tenggiz Güregen<Tenkkiz Kūrkān）の娘であり、クトイ・カトンのオルドにいた。フ

レグ・カンがイランの地に來るとき、彼女をクトイ・カトンのオルドの長に定めた。(20)　(JT/A3: p.11)

アリカン・エゲチの父親のテンギズ・グレゲンは、次の『集史』部族編オイラト族の記事に見られるように、クドカ・ベキと親戚關係にあり、初めグユクの娘を娶ってグレゲンとなった人物である。

オイラトの部族長であるクドカ・ベキと親類關係にあるアミールたちやグレゲンたちの中の一人は、テンギズ・グレゲンである。グユク・カンは彼に娘を與え、彼は婿となった。グユク・カンが死去しモンケ・カンが王位に卽いたとき、グユク・カンの一族と何人かのアミールが反逆を謀り、アミールたちが處刑された。そのとき、テンギズ・グレゲンも告訴され、彼の兩腿の肉がそげ落ちるほど棒で打たれた。その後、彼のカトンであったその娘が彼の助命を請い、彼を彼女に授けた。　(JT/A1: p.227)

從って、フレグは、クトイ・カトンの第一オルドを、クドカ・ベキ家の親戚であり、それまで第一オルドの側室であったアリカン・エゲチに任せたことになる。これは、ウンギラト族との姻戚關係よりも、オイラト族との姻戚關係を重視する方向へ切り替えたことを意味するであろう。

さらに、フレグは、後繼者としてクドカ・ベキ家のクイク・カトンから生まれたジュムクルを選び、モンゴル高原のオルドと軍隊を託した(松田　1980: pp.44—46)。このジュムクルは、クドカ・ベキ家からブカ・テムルの娘ノルンを娶ったので、クドカ・ベキ家の血を引くだけでなく姻戚關係も持っていた(『集史』部族編オイラト族、JT/A1: p.229)。

このようにして、モンゴル高原のフレグ家は、ジュムクルを中心にクドカ・ベキ家との姻戚關係で固まり、フレグ自身は、クドカ・ベキ家のブカ・テムルとその姉妹のオルジェイ・カトンを連れてイランに向かったのである。

ジュムクルの世代では、フレグとオルジェイとの間に生まれた娘モングルゲンが、ブカ・テムルの息子チャキルに嫁いだ(『集史』フレグ・カン紀、JT/A3: p.15)。これらの通婚は、やや複雑であるが、**圖9**のように、ギブ・アンド・テイクのパターンにそった交換婚になっている。ジュムクルの世代を見てみると、ノルンはチャキルの姉妹であり、チャキルが娶

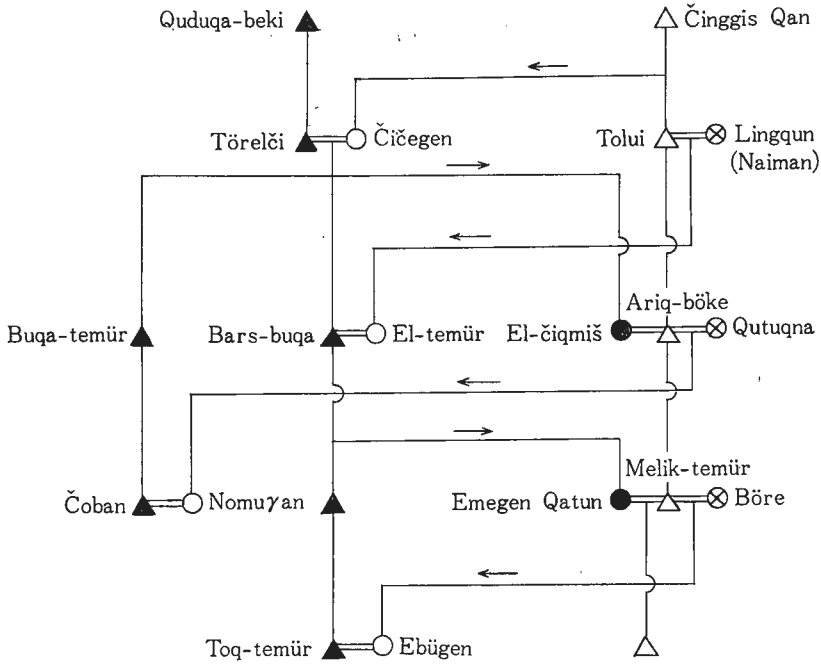

圖10 アリク・ブケ家とクドカ・ベキ家の通婚關係

ったモングルゲンは、ジュムクルの姉妹なので、ジュムクルとチャキルの間で姉妹交換婚が行われたことになる。以上の通婚の結果、ジュムクルは、クドカ・ベキ家出身のクイク・カトンの息子であるだけでなく、母親の姪に當たるノルンを娶り、さらに姉妹のモングルゲンがノルンの兄弟に嫁ぐという密接な姻戚關係が生じた。

以上のように、一時、ウンギラト族との姻戚關係に傾いたフレグ家は、フレグがイラン遠征へ出發した一二五三年の時點では、完全にオイラト族クドカ・ベキ家との姻戚關係を中心とした態勢を固め、以後その傾向をますます強めたのである。

(6) アリク・ブケ家とクドカ・ベキ家

トルイ家の中で、フレグ家と並んでクドカ・ベキ家と密接な姻戚關係を作り上げていったのはアリク・ブケ家である。前述のように、アリク・ブケは、トレルチの娘エル・チクミシを娶ったのであるが、同じ世代でもうひと組の婚姻が行われた。それ

は、『集史』クビライ・カン紀に、

リンクン・カトン（Lingqun Qatun<Linkqūn Khātūn）が亡くなったとき、彼女からエル・テムル（El-temür<Īltemūr）という名の娘が殘された。彼女をバルス・ブカ・グレゲン（Bars-buqa Güregen<Bārs-būqā Kūrkān）に與えた。

（JT/TS 1518: fol. 214a）

とあるように、トルイとリンクン・カトンの間に生まれた娘エル・テムルとトレルチの息子バルス・ブカとの婚姻である。エル・テムルはアリク・ブケの姉妹であり、エル・チクミシはバルス・ブカの姉妹であるので、アリク・ブケとバルス・ブカの間で姉妹交換婚が行われたことになる。

アリク・ブケの世代以降も、**圖10**に示すように、二つに枝分かれしながら、きれいにギブ・アンド・テイクのパターンにそって通婚關係が連續した。その結果、チンギス・カンからトルイ、アリク・ブケをへて、メリク・テムルおよびその次の世代にいたるまで、長期にわたって相互の連續的な通婚關係が維持されたが、これが末子の系統である點は興味深い。

以上述べてきたように、クドカ・ベキ家が廣く網をかけるように姻戚關係を擴大した結果、チンギス・カンの孫、曾孫の世代では、ジョチ家のバト、トルイ家のジュムクル、アリク・ブケがクドカ・ベキ家と密接な姻戚關係を持ち、チャガタイ家にはカラ・フレグの寡婦でクドカ・ベキ家出身の當主オルガナがいた。後にクビライと帝位を爭ったアリク・ブケ派のメンバーには、このうちアリク・ブケ、オルガナ、ジュムクルが含まれており、ジョチ家もアリク・ブケを支持していたことが明らかにされている（杉山　1982: pp. 300, 306—307）。

四　モンケの卽位とアルチ・ノヤン家

クドカ・ベキ家が姻戚關係を一氣に擴大し、姻族としての勢力を強めていったのに對して、アルチ・ノヤン家も、オゴ

デイからグユクの時代にかけては、オゴデイ家、トルイ家と密接な關係を結び姻族としての確固たる地位を守っていた。ところが、その後、モンケの卽位にともない、アルチ・ノヤン家は姻族としての勢力を弱めたと思われる。以下その點を論じてみたい。

周知のように、モンケの卽位に至る過程は、トルイ家とオゴデイ家の帝位繼承爭いであり、その爭いにトルイ家が勝ち、モンケが卽位した。この時、帝位をめぐって爭ったトルイ家とオゴデイ家は、前述のように、ともにアルチ・ノヤン家と姻戚關係を強めていた家系であり、どちらが勝ってもアルチ・ノヤン家にとって不利ではないようにも見える。しかし、トルイ家が推したモンケは、第二カトンがアルチ・ノヤン一族の出身ではあったが、クビライほど密接な姻戚關係を結んでいなかった。むしろ、アルチ・ノヤン家との關係が強かったのは、モンケと帝位を爭ったシレムンの方であり、シレムンは母親が前述のカタカシであり、母方でアルチ・ノヤン家の血を直接引いていたのである。チンギス・カン家の姻族にとって勢力を強める最大の機會は、一族出身のカトンから生まれた息子が帝位につくことであり、アルチ・ノヤン家にとって、シレムンがちょうどそれに當たるのである。

この帝位繼承爭いを經て、一二五一年にモンケが卽位すると、その直後に行われた以下に述べる處置は、いずれもアルチ・ノヤン家にとって姻族としての勢力を縮小させるものであった。

まず、アルチ・ノヤン家出身であるシレムンの母親カタカシは、オグル・ガイミシとともに處刑され、シレムンは流刑に處せられた（Allsen 1987: pp. 31—32）。これにより、オゴデイ家とのつながりで築かれていたアルチ・ノヤン家の姻族としての勢力の基盤の一方は崩れたことになる。

また、そのとき唯一アルチ・ノヤン家と密接な姻戚關係を維持していたのはクビライ家であったが、クビライはモンケより中國方面の征服を命じられ、アルチ・ノヤン家の牧地に鄰接する金蓮川一帶に移住した（杉山 1992: pp. 151—152）。これにより、クビライ家とアルチ・ノヤン家の密接な關係は決定的となったが、モンケ政權の中心からは遠ざかることに

なった。

そして、前述したように、一時アルチ・ノヤン一族との姻戚關係に傾いていたフレグ家は、一二五三年にイラン遠征に出發するに當たって、モンゴル高原のオルドを、クドカ・ベキ家の關係者で完全に固めてしまい、アルチ・ノヤン家との姻戚關係は重視されなくなった。

以上のように見てくると、モンケ卽位以前には、モンゴル高原のトルイ家の牧地、およびカラコルム周邊のオゴデイ家のオルドに、アルチ・ノヤン家出身のカトンとして、オゴデイ家のカタカシ、クビライ家のチャブイ、フレグ家のクトイ、モンケ家のクタイが居たわけであるが、このうち、カタカシは處刑され、チャブイはクビライとともに東南へ移り、クトイはクドカ・ベキ一族の側室にオルドを譲り、いずれもアルチ・ノヤン家の姻族としての影響力が弱まる方向へ事が展開した。一方、この頃モンケは、クドカ・ベキ家出身のオルガナをチャガタイ家當主の座につけたのである。

モンケの第二カトンのクタイについては、モンケの宮廷であまり重んじられていなかったことが、ルブルクの旅行記から窺える。ルブルクによると、最も寵愛されたのは、クドカ・ベキ家出身の第三カトンのオグル・トトミシであり、『旅行記』二八章一四節に、オグル・トトミシとその娘シリンについて、

その住居は、彼（モンケ）がたいへん愛していた（multum dilexerat）キリスト教徒の女主人のものであった。前述の娘（シリン）は彼女から生まれた。（Rubruc/Wyngaert: p. 249）

と記されている。イキレス族出身の第一カトンのクトクタイは、無斷で家來を處刑してモンケを激怒させるなど、モンケにあまり好まれていなかった様にも見えるが、長子バルトの母親として第一カトンの地位を守っていた。それに對して、アルチ・ノヤン一族出身のクタイは、あまり重んじられていたようには見えない。例えば、彼女はルブルクの滯在中に病氣になったが、モンケのオルドが移動するときに置いて行かれ、その後に病死したのである（『旅行記』三二章六節）。

以上のように、モンケの卽位後、アルチ・ノヤン家出身のカトンたちにもたらされた境遇から見ると、アルチ・ノヤン

家の姻族としての勢力は弱まったのであり、以後、アルチ・ノヤン家の通婚關係は、主としてクビライ家との關係へ縮小してしまったと考えられる。

まとめ

最後に、以上述べてきた論點をもう一度まとめておきたい。

(1)チンギス・カンの子の中で、ボルテ・フジンの出身家系であるウンギラト族のアルチ・ノヤン一族と姻戚關係を持ったのは、年上のジョチとチャガタイであり、特にジョチは、アルチ・ノヤン家のチグゥと姉妹交換婚を行い、通婚パターンから見れば、ジョチ家とアルチ・ノヤン家との間で、相互の通婚を次世代へ連續させることのできる形であった。

(2)ところが、次世代では、オゴデイ家とトルイ家が、巻き返しを圖るようにアルチ・ノヤン家と相互の通婚關係を結び、そのうち、トルイ家のクビライとアルチ・ノヤン家のオチンとの姉妹交換婚は、以後數世代にわたる連續的な通婚關係のスタートとなった。

(3)同じ頃、オイラト族のクドカ・ベキ家は、チンギス・カン家との姻戚關係を一氣に擴大し、アルチ・ノヤン家から遠ざかったジョチ家とチャガタイ家、また、トルイ家の中でもアルチ・ノヤン家との關係が薄いフレグ家とアリク・ブケ家が、クドカ・ベキ家との連續的な通婚關係を展開した。

(4)クドカ・ベキ家が急成長する中、アルチ・ノヤン家は、オゴデイ家、トルイ家との密接な姻戚關係を維持していたが、モンケが、シレムンとの帝位繼承爭いに勝って卽位すると、アルチ・ノヤン家は姻族として影響力を弱め、主要な姻戚關係はクビライ家との關係だけに縮小したと思われる。

註

（1）チンギス・カン家とアルチ・ノヤン一族との通婚關係については、那珂通世、クリーヴス、アンビス、ボイル、村上正二、白拉都格其、葉新民、志茂碩敏、岡田英弘、杉山正明諸氏の研究がある（那珂 1907: pp. 326—327, 1915: pp. 10—12; Cleaves 1950, 1951; Hambis 1954: pp. 17—21, 160—162; Boyle 1958: pp. 174—175; 村上 1972: 391—393; 白拉都格其 1979; 葉 1982; 志茂 1983: pp. 672—673; 岡田 1985; 杉山 1992: pp. 100—101, 152—154）。

（2）チンギス・カン家とクドカ・ベキ家との通婚關係については、那珂通世、アンビス、岡田英弘、志茂碩敏、白翠琴諸氏の研究があり、とくに岡田氏の論文により、通婚關係の基本的な事實は明らかにされている（那珂 1915: pp. 48—49; Hambis 1954: pp. 121—129; 岡田 1974: pp. 3—8; 志茂 1983: pp. 669—672; 白 1984）。

（3）「チンギス・カン家の政略結婚にみられる互酬的縁組システム」『國立民族學博物館研究報告別冊』に掲載豫定。

（4）イェスルンの父親をトプカプ・サライ所藏本では Qabā Nūyān (QBA NWYAN) と記しているが、部族編では QṬA であるので (JT/A1: p. 394)、第二子音は ṭ である。一方、『集史』には、この人物を Qatāy (QTAY) あるいは Qatāy Nūyān (QTAY NWYAN) とする箇所があり (JT/A1: p. 399; JT/TS 1518: fol. 95b, 130a)、その箇所に對應する『聖武親征錄』にも「怯台」とあり一致するので、「カタイ」または「カダイ」が正しいであろう。『元史』卷一の「可孫」はどちらともとれる。村上正二氏はこの人物を『元朝祕史』二〇二節のカダイ・グレゲン Qadai Güregen にあたるとする（村上 1972: p. 391）。

（5）ボイルは、ブロシェの校訂 TWRKAN に從い、Tūkān Khātūn > Tögen Khatun と解した (Boyle 1971: p. 135)。ロシア語譯は Туркан-хатун とする (JT/Верховский: стр. 88)。『集史』のイルカン國時代の寫本である JT/TS 1518: 168a と JT/BL 16688: 8b には、ともに TRKAN とあり、『ハーフェズ・アブルー全書』所收の『集史』には、一例は TWRKAN だがもう一例は TRKAN とある (MḤA/TS 282: 408a, 409b)。一方、『五族譜』のチャガタイのカトンの欄には、TWKAN とある。ここでは、ボイルに從って一應「トゲン」としておくが、TRKAN の方に基づき Terkān Khātūn > Terken Qatun と解して「テルケン・カトン」と讀む可能性もある。

（6）ジョチの血筋が疑われる話は、『元朝祕史』二五四—二五五節に出てくるが、この話自體は、中央アジア遠征中のジョチとチャガタイの喧嘩、チンギス・カンが死去直前に行ったオゴデイの後繼者指名、ジョチの誕生にまつわる事情の三つが結び附けられたフィクションであろう。

（7）この人名の綴りは、原文には KRJW とあり、そのまま讀めば Karjū であるが、オゴデイにこの名の息子はいない。そこで、KRJW は KWJW の誤りと考え、オゴデイの第三子 Kūjū と解釋する。

(8) ただし、オイラトの火雷公主位に對應する人名は、この記事には見あたらない。松田 1978: p. 39 を參照。

(9) 『元史』巻一一四后妃傳一には、クタイを「特薛禪の孫の忙哥陳の女なり」と記すが、巻一一八特薛禪傳には、クタイとイェスルについて「按陳（アルチ）の從孫の忙哥陳の女なり」と記しており矛盾する。クビライがアルチ・ノヤンの娘チャブイを娶ったことを考えると、後者の特薛禪傳の記述は世代が離れすぎる。特薛禪傳は他にもおかしい點があり、『集史』がナチンの娘と記すナムブイを「納陳の孫の僊童の女なり」と記し、ナチンの曾孫としている。アンビスの作成した系圖は、クタイについて后妃傳の記事の方を採用しており、それに從いたい（Hambis 1954: tableau 2）。おそらく、クタイとイェスルは、アルチ・ノヤンの甥の娘であろう。

(10) ジョリケの母親の名前は、『集史』には記されていないが、ブロシェは、Mu'izz al-Ansāb にもとづいてサルク・カトンとした（JT/Blochet: p. 202）。しかし、Mu'izz al-Ansāb に、「HWKH の母親」として記された Sārūq Khātūn は、「Müke (MWKH) の母親」の誤りに過ぎず（MA/BN 67: fol. 46a）、このサルク・カトンは、『集史』クビライ・カン紀と部族編ナイマン族の項に、第八子モゲ（Mögе〈Müke）の母親、クビライの乳母として登場するサルクのことである。

(11) 箭内氏は、帖古倫大皇后が、『元史』巻一一八特薛禪傳で、アルチ・ノヤンの孫の脫憐の娘として記されていることが世代的にありえないことを根據に、帖古倫大皇后がクビライのカトンであったことを否定し、チャブイを大斡耳朶の大皇后とみなした（箭内 1930: pp. 692—694）。しかし、特薛禪傳には、ナチンの娘ナムブイを、ナチンの孫の僊童の娘とするなどこの類の混亂がある。一方、『元史』食貨志三の世祖四斡耳朶の條において、至元二一年（一二八四）に江南戸鈔を分與したとする第二斡耳朶は、明らかにチャブイのオルドを指しており、チャブイのオルドを第二斡耳朶とする『元史』后妃表と合致するので、簡單にはクビライの大皇后テグルンの存在を否定することはできないように思われる。

(12) クビライとオチンの關係については、クビライとオチンが「二重の義兄弟」であることを、杉山正明氏がすでに指摘されている（杉山 1992: p. 154）。

(13) クビライからトク・テムルにいたる交換婚については、別稿「チンギス・カン家の政略結婚にみられる互酬的緣組システム」に詳しく論じたので參照いただきたい。

(14) クイク・カトンの名前は、『集史』部族編の一例は、Kübāk Khātūn となっている。しかし、フレグ・カン紀では、このカトンの名前は、Kūik Khātūn である。フレグ・カン紀には、この名前が六例あり、最良の寫本であるトプカプ・サライ本（JT/TS 1518）によれば、六例のうち二例は下點が附いていないため判定できないが、殘りの四例は、第二子音がγであることを確認できる。そこで、一應、クイク・カトン Küik Qatun と解しておく。ロシア語譯では、Гуюк-хатун と讀んでおり（JT/Арендс: стр. 18, 19, 21）、その他、Küyük Qatun, Güik Qatun などの可能性が考えられる。

(15) この記事では、トレルチとチチェゲンから生まれた娘を二人としているが、これは誤りで、彼女らにはほかにも姉妹がいたという傳承があることをラシード自身が記している (JT/A1: p. 225; 岡田 1974: p. 4)。

(16) Boyle 1971: p. 143. ペルゲシを一時後繼者としたとする『集史』の記事は、ロシア語譯には存在しない。それは、トプカプ・サライ本 (JT/TS 1518) にこの部分が缺けているからであり、同系統と思われる JT/BL 16688 にも缺けている。しかし、JT/BL 7628, JT/BN 1113, MHA/TS 282, JT/Saltykov の諸寫本にはこの記事が存在する。

(17) カラ・フレグの母親については、『集史』トプカプ・サライ本に附けられた系圖 (JT/TS 1518: fol. 170b—171a)、および『五族譜』のチャガタイの系圖に添え書きされた記事がある。『五族譜』には、モエトゥケンの四人の息子バイジュ、ブリ、イェスン・トア、カラ・フレグの各々に、母親はナイマン族出身の側室であると記されている。ただ、『集史』本文には、ブリの母親は、家の子 (ev-oghlan) の妻であり、モエトゥケンが彼女を懐妊させたが、ブリを出産した後、彼女を夫に返したと記しており (JT/TS 1518: fol. 168b)、やや食い違う。

(18) この部分は、トプカプ・サライ本 (JT/TS 1518: fol. 21b) には、オゴデイ Ūktāy とあり、アリー・ザーデの校訂本はそれを採用している (JT/A1: p. 224)。しかし、オゴデイとあるのは、この寫本だけであり、JT/KMSM 2131, JT/BL 7628, JT/Saltykov, MHA/TS 282 は、チャガタイとなっている。トプカプ・サライ本は良寫本であるけれども、この寫本だけが他と異なる場合は、トプカプ・サライ本の方を誤寫とみなすべきであろう。

(19) 原文には Kūbāk Khātūn とあるが、フレグ・カン紀の Kūik Khatūn の方が正しいと思われるので訂正した。前註(14)參照。

(20) 「彼女」は「彼」すなわちフレグの息子アジャイととる可能性も文法的にはありうるが、フレグがイランに向かった一二五三年に、一二四七年生まれの第七子のテクデル・アフマドが七歳、アジャイはそれより年下であるので、ここはロシア語譯どおり「彼女」の意味である (JT/Арендс: стр. 20)。

參考文獻表

Allsen, Thomas T.
1987 *Mongol Imperialism.* California: University of California Press.

足利惇氏・田村實造・惠谷俊之
1968 『イランの歴史と言語』京都大學。

白拉都格其
1979 「弘吉剌部與特薛禪」『內蒙古大學學報』哲學社會科學版、第三—四期。

白翠琴
1984 「斡亦剌貴族與成吉思汗系聯姻考述」『民族研究』第一期。

Boyle, John Andrew
1958 *The History of the World Conqueror*. 2 vols, Manchester.
1971 *The Successors of Genghis Khan*. New York: Columbia University.
Cleaves, Francis Woodman
1950 The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-jui. *Harvard Journal of Asiatic Studies* (以下 *HJAS* と略す), 13.
1951 The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of J̌igüntei. *HJAS*, 14.
ドーソン A. C. M.′ 佐口透譯注
1968 『モンゴル帝國史2』平凡社。
Hambis, Louis
1954 *Le chapitre CVIII du Yuan che*, Leiden: E. J. Brill.
Jackson, Peter
1982 ABAQA. *Encyclopaedia Iranica* (以下 *EI* と略す), vol. 1, fas. 1, ed. by Ehsan Yarshater, London: Routledge and Kegan Paul.
1984 AḤMAD TAKŪDĀR. *EI*, vol. 1, fas. 6.
松田孝一
1978 「モンゴルの漢地統治制度――分地分民制度を中心として――」『待兼山論叢　史學編』一一。
1980 「フラグ家の東方領」『東洋史研究』三九―一。
村上正二
1972 『モンゴル秘史2』平凡社。
那珂通世
1907 『成吉思汗實錄』大日本圖書。
1915 「成吉思汗實錄續編」『那珂通世遺書』大日本圖書。
岡田英弘
1974 「ドルベン・オイラトの起源」『史學雜誌』八三―六。
1985 「元朝秘史の成立」『東洋學報』六六―一・二・三・四。
Pelliot, Paul
1949 *Notes sur l'histoire de la Horde d'Or*. Paris.
邵循正
1985 「《元史》刺失德丁《集史・蒙古帝室世系》所記世祖后妃考」『邵循正歷史論文集』北京大學出版社。原載『清華學報』一九三六年一一月。
志茂碩敏
1983 「イル汗國史上におけるフラク家姻戚の有力諸部族」『內陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社。
杉山正明
1982 「クビライ政權と東方三王家」『東方學報』五四。
1983 「ふたつのチャガタイ家」小野和子編『明清時代の政治と社會』京都大學人文科學研究所。
1992 『大モンゴルの世界』角川書店。
宇野伸浩
1988 「モンゴル帝國のオルド」『東方學』七六。

箭内亘
1930 「元朝站赤考」『蒙古史研究』刀江書院。
華新民
1982 「弘吉剌的封建領地制度」『内蒙古大學記念校慶二十五周年學術論文集』呼和浩特。

使用史料略號

『集史』Rashīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tavārīkh*.

JT/A1: A. A. Али-заде (ed.), *Джами' ат-Таварих*. Том 1, Часть 1, Москва, 1965.

JT/A3: A. A. Али-заде (ed.), A. K. Арендс (tr.), *Джами' ат-Таварих*. Том 3, Баку, 1957.

JT/Арендс: А. К. Арендс (tr.), *Сборник Летописей*. Том 3, Москва-Ленинград, 1946.

JT/Верховский: Ю. П. Верховский (tr.), *Сборник Летописей*. Том 2, Москва-Ленинград, 1960.

JT/Blochet: E. Blochet (ed.), *Djami el-Tévarikh*, vol. II, Leiden and London, 1911.

JT/TS 1518: MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Revān Köşkü 1518.

JT/KMSM 2131: MSS. Kitābkhāna-yi Majlis-i Shūrā-yi Millī 2131. (足利ぎん 1968 所收)。

JT/BL 16688: MSS. British Library, Or. Add. 16688.

JT/BL 7628: MSS. British Library, Or. Add. 7628.

JT/BN 1113: MSS. Bibliothèque Nationale, Supplément persan 1113.

JT/Saltykov: MSS. Saltykov Shedrin, 2458.

『ワッサーフ史』Vaṣṣāf, *Tārīkh-i Vaṣṣāf*.

TV/TS 3040: MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet III 3040.

『ハーフィズ・アブルー全書』Ḥāfiz-i Abrū, *Majmū'a-yi Ḥāfiz-i Abrū*.

MḤA/TS 282: MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Bagdad Köşkü 282.

『五族譜』*Shu'ab-i Panjgāna*.

SP/TS 2937: MSS. Topkapı Sarayı Müzesi, Kütüphanesi, Ahmet III 2937.

『ムイッズ・アンサーブ』*Mu'izz al-Ansāb fī-shajarat salāṭīn Mughūl*.

MA/BN 67: MSS. Bibliothèque Nationale, Ancient fonds persan 67.

ルブルク『旅行記』Willelmi de Rubruc, *Itinerarium*.

Rubruc/Wyngaert: Van den Wyngaert, A., *Itinera et relationes fratrum Minorum saeculi XIII et XIV*, (*Sinica Franciscana* vol. 1), pp. 164—332, Quaracchi-Firenze, 1929.

【附記】本稿は財團法人三菱財團人文科學研究助成（平成二一四年度）による研究成果の一部である。

SHAIBĀNĪ KHĀN AND 'ULAMĀS
—Yāsā and Sharī'a in Early 16th Century Central Asia—

ISOGAI Kenichi

Since Shaibānī Khān captured Samarqand in 1500, a full-scale rule of Shaibānid Dynasty over Mā warā' al-Nahr have been realized. However, it is not clear hitherto how Shaibānids dealt with Islamic society under their control. This article aims to throw light on the problem above mentioned, taking a jurisprudential dispute kept in *Mihmān-nāma-yi Bukhārā* as a basic source.

In this dispute, it is dicussed whether the representation in inheritance, prohibited in Sunni Islamic law, is to be permitted or not. Shaibānī Khān argued for its permission in conformity with his turco-mongol background. But when Ibn Rūzbihān presented an authority, prohibiting the representation, from ḥadīth, and when all the 'ulamās those who were presented there supported it, Shaibānī Khān must have withdrawn his claim.

Shaibānī Khān was a muslim, but at the same time, he was not free from turco-mongol tradition, as symbolized by yāsā of Chinggiz Khān. However, he gave preference to sharī'a when he dealt with Islamic society under his rule.

CHANGES OF AFFINAL RELATIONSHIPS OF THE FAMILY OF ČINGGIS QAN

UNO Nobuhiro

The purpose of this paper is to analyze affinal relationships of the family of Činggis Qan, applying the concept of "exchange of women" in structural anthropology and to show how the affinal relationships changed for several generations.

In the generation of sons of Činggis Qan, J̌oči married Alči Noyan's

daughter and Čaγatai married Alči Noyan's cousin's daughter. Alči Noyan was a leader of Unggirad tribe. The important point to note is that in this generation a sister-exchange marriage was made between J̌oči and Čiγu who was Alči Noyan's son (**figure 1**). It means the establishment of a mutual marriage alliance between the two families.

In the next generation, however, Ögödei's son Küčü married Alči Noyan's granddaughter Qataqaš and Tolui's son Qubilai married Alči Noyan's daughter Čabui (**figure 4, 6**). This means that in place of J̌oči's and Čaγatai's families Ögödei's and Tolui's families formed a marriage alliance with the lineage of Alči Noyan.

On the other hand, a lineage of Quduqa Beki who was a leader of Oyrad tribe expanded their affinal relationship with the family of Činggis Qan. Quduqa Beki's daughter and granddaughters were married to Činggis Qan's grandsons who were Batu, Qara Hülegü, Möngke, Hülegü and Ariq Böke. These marriages were based on a pattern of reciprocal exchange of women (**figure 7**).

Under this situation Möngke Qan ascended the throne. He executed Qataqaš, Alči Noyan's granddaughter, because she was a mother of his rival Širemün. During the reign of Möngke Qan the lineage of Alči Noyan reduced their power as affinal relatives of royal family and practically they maintained their affinal relationship only with Qubilai's family.

FROM THE INSCRIPTION OF THE MONGOL PRINCE BABUŠA'S EDICT

SUGIYAMA Masa'aki

The Chinese local history of Zichuan xian 淄川縣 edited in the reign of Kangxi 康熙 records the inscription of the Mongol prince Babuša's edict erected in the temple of Binglingwang miao 炳靈王廟 at Wangcun dian 王村店, about twenty-five kilometers westward of the town of Zichuan. This edict has very useful informations about the appanages belonging to J̌oci-Qasar *ulus*, located in Eastern Mongolia and North China. Through